雲を友として
―こころと感動の旅―
立松和平

雲を友として

――こころと感動の旅――

雲を友として――こころと感動の旅――

一九八七年八月二十五日　初版発行
一九八七年九月十日　第二刷発行

著　者　立松和平

発行者　渋谷栄治

発行所　全国朝日放送株式会社（テレビ朝日）
東京都港区六本木一―一―一
郵便番号　一〇六
電話　〇三（五八七）五四三二
振替　東京七―五二五三

印　刷
製　本　大日本印刷株式会社

装　丁　吉井俊春

©Wahei Tatematsu 1987 Printed in Japan

ISBN4-88131-089-5　C0095　¥1500E

乱丁・落丁本はお取替えいたします。

定　価　一、五〇〇円

はじめに——雲を友として——

旅とは、何と心躍る響きであろう。古来より、旅は人を魅きつけてきた。旅によって発見があり、交通が生まれ、融合して新しいものが生まれてきた。見果てぬ夢に取り憑かれて、財産はおろか生命までも蕩尽してきた人が、この地上に相次いだ。

流浪をはじめてしまった人は、寄るべのない一抹の悲傷を友として道をいくのであるが、定住を強いられた人にも、旅への誘いがないわけではなかった。彼らは人生そのものを旅と見立てることによって、日々旅の途上にあると考えたのである。

人は何処からかこの世に旅をしてきて、また何処へかに去っていく。人は地上から離れることはできない。したがって、その何処か、つまり他界は、川の向こうや海の彼方や山中など、この地上とつながっているところと考えられた。人は他界から海を越えて現世にやってきて、また川を渡って他界へと旅立っていく。人の上に起こることはすべて旅の途上での出来事である。

この現世に人は赤子として産まれでてくる。旅をしてたどり着いた証拠に、赤子は誰も笠をかぶり旅の衣を身にまとっている。つまり、赤子を包んでいる胞衣が旅装束だと考えられたのである。膜は旅の衣で、胎盤は旅の笠だ。現世に着いて新しい旅をはじめるために、古い旅の衣を脱ぎ捨てる。

可愛い子には旅をさせろという諺がある。旅が人を磨いていく。学問をするのも旅に出ることであり、結婚もそうだ。花嫁は旅の草鞋をはき、乗掛け馬に乗ってくる。婚家の廂にはいる時、花嫁の頭に旅の笠をかざしてやる風習が今も残っている。ハネムーンに出る

のは明治以降のことだが、それでも習慣として定着している。このように、人生の重要な局面は旅になぞらえるのである。

人生上で最大の出来事は死だ。死は悲しい。この世の別れだからだ。しかし、旅人を送ると考えれば、恐怖も悲しみもずいぶんと薄らいだに違いない。死出の旅路は、完全な旅装束になる。手甲に脚半に草鞋をはき、経帷子を着ける。肩からさげた頭陀袋には、三途の川の渡し賃の六道銭とその場所に着いても困らない五穀がはいっている。手には旅の笠を持つ。死とは、川を一本越えるような、旅なのだ。何とやさしい世界観だろうと、ぼくは思う。

この現世でも、ぼくらは旅をつづける。海にあっても、山にあっても、友は雲だ。気負いを捨て、風の間に間にさらさらと雲のように旅をつづけたい。

ぼくらの旅路は、終点がない。その先があるのならいってみよう。それがぼくらを駆り立てる唯ひとつの旅のこころである。風がぼくらの身体の中を吹きとおる。

流離の風に誘われての旅であるが、旅を重ねるにつれ、遠くに何かが見えてきもした。ぼくらの列島は猛烈な勢いで自然が消費されている。山の樹木は最後の一本まで伐られ、海の魚は最後の一匹まで捕られてしまうのではないかと、恐ろしさを覚える。それがぼくらの日本の姿だ。

ぼくらは日本列島の隅々を歩きまわる。今やなけなしになってしまった自然へ、大自然の中に根を生やして樹のようにすっくと立っている人間と彼を支える精神へ、旅をつづける。そして、日本もまだまだ捨てたものじゃないとはっきりいえる瞬間が何度もあるからこそ、発見の旅がつづけられるのだ。

旅が楽しい。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

雲を友として——こころと感動の旅——

はじめに――雲を友として――　1
流氷は生きている――知床、宇登呂　8
華やぐ命――知床、羅臼　18
知床今昔物語　26
雪が花に見えた――宗谷、礼文島　44
鮭の旅立ち――西別川、摩周湖　54
馬と鶴――鶴居村　62
春のことぶれ――襟裳岬　72
祈りのヒメマス――十和田、奥入瀬　78
波の行き来――積丹半島（一）　90
挽歌の海――積丹半島（二）　100
頑固な風土――佐渡（一）　108
独立国の夢――佐渡（二）　118

無垢な獣たち——知床の夏 128
噴火からの回復——三宅島 136
遙かな夢の国——長崎 148
彩りの島——天草 158
親父の海——豊後水道 168
耕して天に至る——瀬戸内海 180
錦繡の湖——十和田、奥入瀬 190
冬への予感——知床 198
知床春夏秋冬 206
南の果ての桃源郷——西表島 234
帰ってきた長男坊——与那国 244
あとがき——旅を語る装置—— 254

●写真撮影・立松和平および放送用VTRより

流氷は生きている——知床（しれとこ）、宇登呂（うとろ）

今年もまた北の果て知床に流氷がやってきました。海は見渡す限りぶ厚い流氷に埋めつくされ、春の訪れまで波の音は聞こえません。しかしそこは、生きものたちの活発な活動の場でもあるのです。

真氷だ。はるばるとやってきたアムール河の氷だね。すごい景色だな。男性的で、荒々しくて、たいしたエネルギー。地平線があります。流氷一つ一つは緑色の透明の影がただよっていて、すごいきれいなもんです。汚れてない、全くけがれがないという感じがします。自然そのまま、人間の手が触れてないんですね。

流氷は生きています。潮や風の影響を受けて一瞬一瞬形を変えているのです。いくら見ても見あきることはありません。この美しく荒々しい氷の下は一体どうなっているのでしょうか。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

何とこれから流氷の下に潜ろうというのです。潜るのはこの道二十五年、ベテランのお父さん須賀次郎さんと六年目の娘さんの親子チームです。潮美さんが水中からレポートしてくれます。

穴をあけた海面は五分も経つとすぐシャーベットになります。地上気温は氷点下十八度でした。水の温度は氷点下〇・八度、もっと冷たいと思っていたのに意外でした。

潮美　上の方は鐘乳洞の中のような感じですごくきれいですね。

立松　そのへんから上を見ると氷は明るいですか。

潮美　明るいですね。うす暗く照らされてるような感じです。氷のシルエットがとてもきれいなんですけれど……。

立松　氷の底というのは独特の不思議な世界ですね。

潮美　何かつるつるしてて、こんなに大きいと、氷という感覚がないですね。

立松　流氷の下というのは、不思議な幻想的な世界ですね。

潮美　神秘的な感じがしますね。

立松　本当に鐘乳石が垂れてるようだね。

潮美　ここは氷が沢山集まってて、大理石の大広間みたいな感じですね。きれいですね、エビがところどころ休んでるんですよ。

立松　氷にとまって休んでるの？

流氷下の須賀潮美

潮美　そうですね。ところどころ黄色い点々があるのはエビが……。

立松　きれいだな、本当に……。

潮美　じゃあ、ちょっとライトを消してもらってどんな感じか見てみたいと思います。

立松　そこは暗いですか？

潮美　暗いですね。

立松　そこはもう底が岩ですね？

潮美　はい。大きなヒトデがいます。本当にヒトデという感じで、私の手よりも大きいですね。

立松　手にとって見てもらえますか。

潮美　色がとてもグロテスクであまり触りたくないような感じなんですけど。

立松　我慢してじっと冬を耐えてるヒトデという……。

潮美　そうですね。ここで壁にくっついてひと冬過ごすんでしょうね。

立松　かわいそうだからもとに戻しておいて……。オレンジ色のは何ですか。

潮美　これはイソギンチャクですね。これはオレンジですけれど他に白いのもあります。小さいですけど、花咲きガニの子供が、私の指のところにいるのが見えますでしょうか。かわ

いいですね。

立松　つまんでください。

潮美　ちゃんと花咲きガニの形をしてるんですね。

立松　ずっと耐えしのんできてるわけだ、小さいのに……。かわいいですね。

潮美　こんな狭いところで健気（けなげ）に生きているんですね。立派に大きくなってくださいね。

潮美　ちょっと見えないかもしれないんですけど、この奥にタコの足が見えるんです。タコは卵を抱いていると出てこないっていうことなんで、きっとこのタコは卵を抱いているんでしょうね。

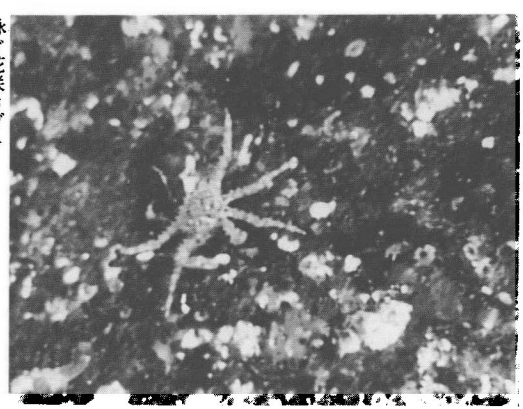
立松　ずっとかえるまで抱いているのかしら。

潮美　それで飢え死にしてしまったっていうタコもいるそうなんで……。母性本能が強いんですね。

立松　そんなタコだったらそっとしてあげるべきでしょうね。

潮美　タコさんが起きてくれなかったようなので、今度はお魚に会いにいきたいと思います。

　ちょっと小さなお魚が、ギンポの類いだと思うんですが……。ドジョウみたいに見えるんです。北のお魚ってあまりきれいじゃないんですけど、こうやって近くで一緒にいると



泳ぐ花咲きガニ

遊べるのでとてもかわいいんです。とても愛嬌がある顔をしてるんです。

立松　寒いから動作が遅いんですかね。

潮美　かわいいんです、顔が……。

（スタジオから）

久米宏　水中メガネの中で吐く息が白くなるっていうのは初めて見ましたね。しかし、流氷を下から見るっていうのも初めて見る景色で、ああいうふうになっているんですね。なめらかな鐘乳洞という感じで……。流氷というのは毎日形が変わるんですって？

立松　沖から押されてくるんです。それで、浜に遮られて、盛り上がったり、潮の具合でまた逃げたり、毎日違いますからね。

久米　キッキッキッと音をたてながら姿を変えるわけですか。

立松　そうですね。ですから、今朝の流氷はどんなかなって見に行くんです。毎日違うから面白いですよ。

久米　穴がいっぱいあいてたんですってね。

立松　小さな氷の塊ですから、下の方に行くとズボッと潜ったりするんで危険なんです。盛り上がりの上の方をなるべく歩くようにしないと……。

ぼくは真水って言っているんですけれど、あとで皆で水割りウイスキーを飲んでみたら、やっぱりちょっとしょっぱかったですね。

久米　氷には塩分が含まれてないって教わったような記憶があるんですけど、そうじゃないんですね。

立松　でも、飲めない量の塩分ではないんです。ちょっとしょっぱいっていう感じ。

立松　今は大体午前七時ぐらいですけども相当冷え込んでますね。

赤沢茂蔵（自然保護監視員）　マイナス十七～十八度くらいあるんじゃないですか。

立松　動物の暮らしも冬は大変ですね。

赤沢　何にも食べるものがなくなるわけですからね。

太い木の頭のあたりに見えてますけれど、鹿です。殆ど木と色が同じでしょ。夏になると奈良にいる鹿と同じに斑点ができるんですよ。今はやっぱり保護色ですから、木の色に変わってしまうんですね。今日あたりは風が上の方から吹いているから割と気がつかないんだけど、逆に下からだと人間よりも先に向こうがみつけてしまうんです。

立松　ずいぶん近くにいるね。人間と共存して生活しているよ

雪中のエゾシカ

うだね、この鹿は……。やっぱりここまで人間に近く生活していると、大切にしてやらないといけないですね。

立松　足跡がたくさんあって、このへんは動物か何かきたんですか。

赤沢　それはキツネみたいですね。ダッダッダ～ッってきたのは……。急な斜面も、あれ皆キツネですよ。

立松　あのへんは相当入り乱れてますね。

何もかもが深い雪に覆われ山には食べるものがなくなるのでしょう。人なつこいキタキツネたちは人家の近くや海岸線まで降りてくるのです。北の冬に生きる厳しさは人も動物も同じなのでしょうか。お互いのいとおしい気持が伝わるのでしょう、逃げようともしないのです。

珍しいオジロワシとオオワシがいます。遙かカムチャッカ半島からオホーツク海を渡ってきたのです。しかし、流氷の訪れとともにいなくなります。餌がとれなくなってしまうためです。ワシは山を越えて知床半島の反対側の羅臼（らうす）に飛び去ったあとで、数羽しかいませんでした。

知床半島の最果ての町、宇登呂です。ここから先が本当の地の果て、道路も雪に閉ざされ人が暮らすことはできないのです。あまりに強い自然が人間を拒むのです。難儀を強いられながらもサケマスの稚魚を育てている人がいると聞いて、訪ねることに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com